

話題の講義ライブ

LIVE 2011



Today's Program

切迫する自然災害に備える

NAGOYA UNIVERSITY

名古屋大学

環境学研究科 地震火山・防災研究センター

5.31.Tue. at Nagoya

10:30~12:00

鈴木 康弘 教授



名古屋大学 教養教育院の魅力

名古屋大学は、平成5年に教養部を廃止。平成6年4月より、従来の一般教育に代えて各学部に通ずる基礎教育及び教養教育を全学共通教育とした。高度な専門性と豊かな人間性のかん養を目的とする新たな教育を教養教育院で実施している。「全学教育」と呼ばれるもので、「独創的で自立した豊かな個性を備えた知識人を育成するために、それにふさわしい基礎教育及び教養教育を全学的な責任体制で実施する」教育である。個別の専門や研究科の枠を超えて、総合的な思考力や判断力を培うことのできる点が特徴だ。

学問領域の垣根を超えて 巨大地震への 心構えを学ぶ

総勢11名の先生が講義を担当！ 地震研究の最前線を学ぶ

名古屋大学では、昨年12月に「減災連携研究センター」を開設するなど、従来から巨大地震に対する防災・減災の研究やシステム作りに積極的に取り組んでいる。「切迫する自然災害に備える」と題されたこの講義も、その大きな流れの中に位置づけられるものだ。工学、理学、あるいは社会学や心理学といったあらゆる学問領域を横断した全学部生向けのカリキュラムである。第一線で活躍する総勢11名の先生たちが、持ち回りで講義を行うという豪華なものとなっている。

この日、登壇したのは、環境学研究科の鈴木康弘先生。「活断層・変動地形学の現状と課題」というテーマのもとに、講義が進められた。資料とともに配られたのは、赤と青の二色からなる眼鏡状の3Dシート。怪訝な表情を見せる学生に、「あとで3D体験してもらいます」と、先生はにこやかに告げる。

はじめに教室のスクリーンに投影されたのは、歴史年表。今年3月に起きた東日本大震災は、869年に起きた貞観地震の1100年ぶりの再来の可能性が高いといわれている。歴史をひも解くと、貞観地震の後、内陸の活断層に起因する地震が相次いだとい



う。つまり、海溝型地震の一連の活動期の中で、内陸の活断層もあちこちで地震を引き起こす可能性があるのだ。

地形の起伏（もしくは凹凸）が目の前に！ 3Dシートで浮びあがる活断層の驚きの姿

「それでは実際に活断層を見つけてもらいますよ」

先生がスライドを転じると、二重写しになった航空写真が現れた。学生たちは、先ほど手渡された3Dシートを両目にあてて、眼前に浮かびあがったダイナミックな地形の起伏に、教室内がどよめいた。映し出されたのは、愛媛県にある中央構造線活断層。学生たちは目を細めたり、顔を前に乗り出したりしながら、断層のありかを探している。しばらくして先生が指し示したのは、写真の北側



続く二枚目の写真は、

さらに断層の様子を鮮明に捉えている。川の流れに直交するように断層が走っているのがある。また、谷が一方方向にうねっている様子も見えて取れる。

総合的な知識が必要とされる防災 学生たちに期待される力とは？

「活断層が引き起こす地震は、海溝型の地震と比べて、別の深刻さがあります」

講義の終盤、先生はこう切り出した。一九九五年に起きた阪神・淡路大震災では、およそ死者の9割の人々が圧死したという。しかもそのうちのさらに9割が即死だったといわれており、一瞬のうちに5千人余りの人々が命を落としたことになる。

地震のエネルギーはマグニチュード7.3で、東日本大震災と比べると、数百分の一ではない。だが活断層による地震は、我々のすぐ足元に震源がある。それゆえに、ひとたび発生すると大きな災害へとつながってしまうのである。

それだけに、日頃からの備えが重要となる。すでに

海外では、活断層上の土地を緑地にするといった事例もある。翻って、日本の対策は必ずしも十分ではないと、先生は指摘する。それだけに、今後、社会で活躍していく学生たちへの期待も高い。

「防災の課題を解決するには、総合的な取り組みが必要。地震研究者や政策論の専門家だけに頼っていていいというものではありません。学生たちには、これからの防災問題を担うオピニオンリーダーになってほしいですね」

近い将来に予測される東海・東南海・南海の三連動地震。有事の際に「自分ができることは何かを考えてほしい」と先生のメッセージは、学生たちの胸にしっかりと届いているようだった。

VOICES of University Students



西山 遼さん (左)

工学部2年

長野 里衣さん (中)

理学部2年

古田 望美さん (右)

医学部4年

3D眼鏡をかけて断層を見たのが、とても有意義な体験でした。将来はドクターヘリや防災ヘリコプターの設計に携わりたいと考えています。災害の基礎を知りたかったのと、ここで得た知識を復興や救助などの現場で活用したくて、この講義を受講しました。

私は理学部の地球惑星科学科なのですが、自分の専門の講義で習ったことをこの講義で再確認したり、より実用的に活用できると感じています。高校の先生を目指しているのですが、生徒たちにも防災に興味を持ってもらえるように、地震予知などの新しい技術についても学んでいきたいと考えています。

東日本大震災のこともあり、より地震について知りたいと思って、この講義を受講しました。将来は、災害看護に関わる保健師になりたいと考えています。地元の行政機関で仕事に携わりたいと思っているのですが、講義を通じて、この地域の危険性を理解することができたと感じています。

名古屋大学

文学部

教育学部

法学部

経済学部

情報文化学部

理学部

医学部

工学部

農学部

教員数

教授 660名

准教授 507名

講師 111名

助教 430名

学生数

学生数 15,948名

(大学院併設の場合は、院生数も含む)

〔沿革・歴史〕

- 1871年 仮病院 仮医学校開設
- 1939年 名古屋帝国大学創設(医学部と理工学部の2学部)
- 1942年 理工学部を理学部と工学部に分離
- 1948年 文学部、法経学部を設置
- 1949年 旧制学校を包括し、新制名古屋大学として発足(文、教育、法経、理、医、工の6学部)
- 1950年 法経学部を法学部と経済学部に分離
- 1951年 農学部設置
- 1993年 情報文化学部設置
- 2004年 国立大学法人名古屋大学設立

〔オープンキャンパス情報〕

- 8月9日(火)：教育学部、経済学部、工学部
- 8月10日(水)：法学部、医学部医学科、農学部
- 8月11日(木)：文学部、情報文化学部、理学部医学部保健学科

*詳細は大学ホームページをご覧ください。



鈴木 康弘 先生

名古屋大学大学院環境学研究科 地震火山・防災研究センター教授。1961年生まれ。愛知県出身。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。理学博士。専門は地理学、自然災害科学。現在の研究課題は「活断層による地震発生予測」。著書に「活断層大地震に備える」(ちくま新書/2001年)などがある。

資料請求は簡単！

本紙に掲載した大学(私立大学のみ)の案内資料は、P32のハガキ、または東進のウェブサイトwww.toshin.comから請求できます。

資料の請求および
お問い合わせ先〒464-8601 名古屋市千種区不老町
学務部入試課 Tel:052-789-5765
E-mail nyuusi@post.jimu.nagoya-u.ac.jp